

# 批評と紹介

ベイリイ氏編「コータン語佛典」

辻直四郎

Khotanese Buddhist Texts by H. W. Bailey, Cambridge  
Oriental Series No. 3, London : Taylor's Foreign Press,  
1951, 8°, IX, 157 pp.

本書は、十九世紀末葉から今世紀初頭にかけて行われた中央アジア發掘の收獲の一部として、M. A. Stein 及び Paul Pelliot が夫々ロンドンとパリとへ齎したコータン語佛敎寫本三十五種のローマ字轉寫を収めてゐる。

寫本の年代は西曆八・九・十世紀にわたり、その内容に従ひ、著者はこれを十五類に大別してゐる。その中にはサンヌクリット語及チベット語のテキストに對應するものもあり、未知のものもある。目次 (p. V) 及び序言 (p. VII—VIII) の指示に従ひ、その内容を概覽すれば次の如くである。

I. No. 1: *Sūrangamasamādhi-sūtra* (p. 1—7).

Nos. 2—6: *Sūtra texts* (p. 7—11).

II. Nos. 7—12: *Sudhana-Avadhāna* (p. 11—39).

III. Nos. 13—14: *Aśoka-legends* (p. 40—44).

IV. No. 15: *Nanda the Merchant (Jāṭaka)* (p. 45—47).

V. No. 16: *Verses of Prince Tcūh-ttēhī*: (p. 47—53).

VI. No. 17: *Prajñāpāramitā* (p. 54—61).

VII. Nos. 23—24: *Bhadrakalpikā-sūtra* (p. 75—90).

VIII. No. 25: *Homage of Hūyi Kima-tcūna* (p. 91—93).

IX. No. 26: *Aparimitāyuh-sūtra* (p. 94—100).

X. No. 28: *Book of Vimalakīrti* (p. 104—113).

XI. No. 29: *Mañjuśrī-nairātmya-avatāra-sūtra* (p. 113—135).

XII. No. 30: *Suṃukha-sūtra* (p. 135—143).

XIII. No. 31: *Vajrayāna Text* (p. 143—146).

XIV. No. 32: *Invocation of Prince Tcū-syan* (p. 146—148).

XV. No. 18: *Desanā* (p. 62—66).

Nos. 19—21: *Verses* (p. 66—71).

No. 22: *Sūtra* (p. 72—74).

No. 27: *Homage to Buddhas* (p. 100—104).

No. 35: *Trisaraṇa* (p. 156—157).

コータン語寫本の解讀はその發見後時を移さずして成功し、第一次及び第二次世界大戰に煩わされつつも、少數の専門學者の不斷の努力により、出版された文献の量に於ても、語法及び意義の解明に於ても著しい進歩を遂げた。コータン語と並んで中央アジアから發見された印歐語即ちソグド語及び所謂トカラ語の研究も、終戦後相次いで發表された重要な出版によつて頗る活氣を呈して來た時、更にコータン語の豊富な資料がペイリイ教授により提供されたことは、學界のため慶賀に堪えない。

著者が序言の冒頭に於て述べている通り、本書の關係する範圍は多方面にわたるが、最も直接に裨益を蒙るのは、佛敎研究者と語學者とである。上に掲げたリストからも窺ひ得る

が、漢譯・藏譯によつて知られるシェーランガマ・サマーデー・スートラ〔首楞嚴三昧經、(大正藏卷十五)〕の一部(I. No. 1)、Friedrich Weller により梵・漢・藏・滿・蒙對照のテキストが研究され (Leipzig, 1928)、そのコータン語の序跋は既に Sen Konow によつて紹介されてゐる (Avhandling, Oslo, 1929, II. 1)。

バンドラカルピカー・スートラ〔現在賢劫佛名經、(大正藏卷十四)II〕、同じく後者により梵藏文と對比して出版

翻譯されたア・パリミターユフ・スートラ (Hoernle: *Manuscript Remains*, Oxford, 1916, pp. 289—329) の新寫本 (X) 漢譯・藏譯によつて知られるスムカ・グーラーニー〔護命法門

神呪經、善法方便陀羅尼經、金剛祕密善門陀羅尼呪經・延壽妙門陀羅尼經參照、(大正藏卷三十)〕の完本 (X) を收め、佛敎説話としてはディヴィヤ・アヴァダーナ (XXX: *Sudhanakumāra-Avadhāna*) 及びマハーヴァストゥ (ed. Senart tome II, p. 94—115: *Srikinnari-Jātaka*) によつて知られるスダナトマ

ノーハラーの物語 (II)、ディヴィヤ・アヴァダーナ (XXVII: *Kunala-Avadhāna*) に載せられてゐるアッシュョーカとヤン

ス、アショークとクナラの物語(III)、を含み、内容上佛教學者の注意をひくものとしては、般若波羅蜜多の教義の要約(VI)、維摩を對談者とする經典(X)、マンジュシュリー・ナイラートミヤ・アヴァターラ・スートラと稱する未知の經典(XI)、ヴァジュラヤーナに屬する未知のテキスト等がある。八世紀乃至十世紀に於けるコータン地方の佛敎の様相に重要な示唆を與えるのみならず、中亞佛敎界の趨勢を窺わしめる貴重な資料である。

本書の著者はイラン語學者として令名があり、殊にコータン語の研究者としては、Ernst Leumann, A. F. Rudolf Hoernle, Sten Know 等の功業を繼ぎ、既に多數の論著により斯學の進展に寄與されたことは茲に云うまでもない。また教授はインド語學者の立場から、中央アジア諸語に於ける梵語の影響に關しても、厳格な見識を具えている。即ちある中央アジア語中に發見される印度起原の單語の音形を正しく理解するためには、先ずそれが次の五種の起原の何れに由來しているかを検討しなくてはならぬと主張する。五種の起原と

は、(A)西北印度ガンダーラ地方の中期印度語(『Gandhari', BSOAS XI, 1946, pp. 764—797) (B)中央印度、プラークリット(本來は恐らくマガダ語)、(C)普通の佛敎梵語(中印の學匠特に一切有部に使用されたもの)、(D)印度の發音を再現せんとしつゝコータン等中亞各地の綴字法に則つて書き表された佛敎梵語、(E)中亞の佛敎徒の發音に従つて變形された佛敎梵語(例えは Khotan. barja = Skt. bharya 「妻」)を指す(Trans. Philol. Soc. 1947, pp. 139—142)。この見地からして本書は直接コータン語の研究に寄與してイラン語學者に新資料を提供するのみでなく、中亞に於ける佛敎梵語の解明にも貢獻するところ多く、印度學者も亦その恩恵に浴することとなる。本書は寫本の寫眞を添えていないが、ローマ字轉寫は極めて正確、印刷も頗る鮮明で、原本を忠實に代表するものと考えて差支ない。但し専門家以外の利用を容易ならしめるためには、著者自ら豫告している翻譯註解の續刊が必要である。原典出版の成功に滿腔の敬意を表すると共に、別卷の上梓の一日も早からんことを切望する次第である。